

# 日本語のフォリナー・トーク研究 —その来歴と課題—

徳永 あかね

## 要 旨

フォリナー・トークは1960年代後半にファーガソンによって明らかにされたが、やがてその簡略化の現象が「言語を学習する者への最適なインプット」として第二言語習得研究者から注目され始めた。一方、日本語にもフォリナー・トークの現象が見られることがスクータリデス(1981)で報告されたが、欧米の研究の流れに影響され、簡略化の現象に焦点を置いた実証研究が先行して行われた。つまり日本語のフォリナー・トークは、研究対象とされながらもそれ自体の特徴の解明は十分には行われて来なかったのである。

本稿では、今後の日本語のフォリナー・トーク研究を展望するに当たり、次の3つの視点からこれまでの研究を概観する。まず出発点として、60年代から90年代にかけてファーガソンが行った研究より、彼がフォリナー・トークを含めた母語話者のレジスター(言語使用領域)を解明することを試みていたことを確認する。次いで、第二言語習得研究者がフォリナー・トークへ関心を持つに至った欧米の「相互交渉学習理論(interactionist learning theories)」の言語習得観について、Hatch(1978)、Long(1981)、Krashen(1982)を中心に説明する。その上で最後に、日本語のフォリナー・トーク研究について概観し、これまでの知見から日本語母語話者特有のフォリナー・トークが存在することを示唆すると共に、日本語のフォリナー・トーク自体の解明の必要性について提案を行う。

【キーワード】フォリナー・トーク、ファーガソンの研究、レジスター(言語使用領域)、日本語母語話者

## 1. はじめに

言語を扱う研究領域は実に多岐にわたる。領域を超えて明らかにされた知見が別の研究領域で萌芽することもある。例の一つとして、「フォリナー・トーク(foreigner talk)」が挙げられよう。フォリナー・トークは、英語母語話者のレジスター(言語使用領域)として1960年代後半にファーガソン(Charles A. Ferguson, 1921-1998)によって明らかにされた。「レジスター(register)」とは、「個人が同一言語内でコミュニケーション状況に応じて選択する表現手段のヴァリエーションである。例えば、大人が子供や外国人や社会的地位の高い人に話しかける際にそれぞれ通常とは異なる言語を使用するが、そのような場合に見られる特徴的な表現方法の変異体」(『ドイツ言語学辞典』1994:784)のことである。

レジスターの一つであるフォリナー・トークの研究は、Ferguson(1971)の後、欧米のその他の言語における現象を明らかにしようとしたものや、フォリナー・トークと言うレジスターの背景にある理論や方法について言及した研究へと発展していった。そ

の一方で、1970年代、こうしたファーガソンの研究と平行し、フォリナー・トークの簡略化という現象が、言語習得の研究分野において注目された。これはその頃の「簡略化されたインプット仮説」によるもので、単なるインプットだけでは学習者の習得にはならず、学習者が理解できるインプットこそが有効となる、という仮説であった。そのため、学習者が理解できるインプットとして、簡略化された言葉のフォリナー・トークをはじめ、ベビー・トーク(baby talk)やティーチャー・トーク(teacher talk)なども同様に注目を集めた。この流れはKrashen(1980)の「理解可能なインプット仮説」においても、学習者の習熟度に最適な簡略化された言葉が「理解可能なインプット」となり得るとし、依然として注目され続けたが、やがて「最適なインプットは対話者同士のインタラクションによって生み出されるものである」という方向へ発展すると、次第にフォリナー・トークへの注目も薄れていった。

以上のような海外における研究の流れの中、スクータリデス(1981)によって日本語にもフォリナー・

トークが存在することが明らかにされた。しかし、日本語教育という言葉は、第二言語習得の研究分野におけるこの発表は、その後の日本語母語話者のレジスターとしてのフォリナー・トーク研究の方向へは発展せず、坂本他(1989)、志村(1989)のように、欧米の第二言語習得研究の流れに沿った形で続けられた。そのため、日本語のフォリナー・トークに関しては、日本人が持つ一つのレジスターとしての分析や検証が十分になされないまま、簡略化の現象に注目した実証研究が中心となり、これまでの研究を概観した大平(2001)が指摘するように、フォリナー・トークの現象が起きる背景やそのメカニズムは明らかにされて来ない。つまり、「日本語のフォリナー・トーク」は研究対象とされながらも、それ自体の特徴の解明が十分には行われて来なかったと言っても過言ではないであろう。

本稿では、こうした研究の流れを振り返ると共に、言語的な特徴や社会文化背景を英語とは異にする日本語のフォリナー・トークの解明の必要性について提案したい。そのためにまず、フォリナー・トークが明らかにされた当時のレジスター研究を、ファーガソンの研究を出発点として、その後の海外における研究の流れを概観する。次いで、国内におけるフォリナー・トーク研究がこれまで欧米の研究の流れにどのように影響されて来たのか、その歴史的な研究背景を概観した上で、今後の研究への提案を行う。

## 2. レジスター研究とフォリナー・トーク

### 2.1 ファーガソンのレジスター研究

ファーガソンは、ペンシルバニア大学で心理学を専攻していたが、心理学者と記号学者とが言語について議論を行っている場面が、いずれも実際の言語を見ずに行われている議論にすぎないことに疑問を抱き、「科学としての言語学」、つまり心理学者たちが実際には焦点を当てることがなかった「人々が実際に使っている言葉」の研究へと傾倒していった(Huebner 1996)。人々が実際に話す言語の中にある普遍的特性(language universals)を明らかにしようとしたのである。

初期の頃のファーガソンの研究は「ダイグロシア(diglossia)」であった。ダイグロシアとは、同一言語の二つの変種が並び用いられる現象で、日本語では「二言語変種使い分け」と訳されている。「一つの社会の中で二つの言語あるいは同一言語の二つの

変種が並び用いられる、それぞれの使用目的が分化している状態」(Richards, Platt and Weber 1985 山崎・高橋・佐藤・日野訳 1988 : 105)とも説明されるものである。彼自身はこの言葉をもって特定の言語状況、言語変異の過程について共時的な変種(variation)が存在し、それはある社会的グループが、他の社会的グループとの差別化を図るために、言語構造や使い方を変化させて使用することを明らかにした(Ferguson 1959)。この現象を「ダイグロシア」と名付けたのである。このダイグロシアの研究に見られるように、ファーガソンは人々が日常生活のなかで使い分ける「変種」に注目し、その後の様々な層で起こる変種について明らかにしていった。

ダイグロシアの現象解明に続く主な研究では、アジア、欧米の6つの異なる言語のベビー・トークを比較分析し、そこに普遍的な規則を見出した研究(Ferguson 1964)などがあるが、これは異言語間の境目における現象を解明した先駆的な研究であった。ファーガソンは、異なる言語間に共通するベビー・トークの普遍的な側面を発見したことについて、その論文の中で自然現象的に行われる人間の言語の営みの不思議さ、偉大な可能性を秘めた母語話者の言語の営みへの畏敬を表している。ここから彼がレジスター研究に惹かれた理由を窺い知ることが出来る。

Ferguson(1971)では、簡略化と言う点で共通した3つのレジスター、ベビー・トーク、フォリナー・トーク、ピジン(pidgin)とを比較してそれぞれのレジスターに見られる簡略化の目的に違いがあることを明らかにし、これら3つが異なるレジスターであることを言及した。この研究は、同様に「簡略化」と言う現象が見られるレジスター同士を、異なるレジスターであると認定するのに必要な分析視点を提示したものであった。この中で、フォリナー・トークについては、「分かり易いように」と言う配慮のもと簡略化がなされ、その言語を使用する相手の話し方を真似る、と言う特徴を挙げた<sup>1)</sup>。

当時のファーガソンの研究は、70年代のアメリカ社会における移民問題と無関係ではない。当時の人々は、英語が話せない移民とコミュニケーションをするために調整を行うと共に、移民が話す英語を真似、文学などにおいて「外国人の話し方」として独特の英語の使い方をする、と言う社会現象があった。このフォリナー・トークの定義を含めた研究背景については次章で述べる。

Ferguson(1981)ではその当時の研究の動向を概観し、一般的な簡略化現象のレジスターの中で、フォリナー・トークがどのような位置を占めるものであるかに言及している。そのなかでフォリナー・トークを含めたレジスター研究全体における観点として(1)レジスターの多様性が普遍的であること、(2)レジスターが存在すること、(3)レジスターシステムは通時的に変化し、異言語間では異なること(下線部は筆者)、の3点からの分析の必要性をあげ、当時のフォリナー・トーク研究はレジスターとしてその域が十分に明らかにされていないことを指摘した。ファーガソンの(3)の見解に従えば、日本語母語話者のフォリナー・トークも通時的に変化するシステムを有し、且つ、それは英語母語話者のものとは異なる特徴を持つものである。従って、日本語学習者の言語習得を促進するインプットになり得るかどうかの実証研究を行うためには日本語のフォリナー・トークについて解明がなされていなければならない。これについては先の Ferguson と同時期、スクータリデス(1981)によって日本語においてもフォリナー・トークとしてのレジスターが存在することが明らかにされた。しかしその後は主に第二言語習得研究の立場から研究が進められ、ファーガソンのような社会言語学の立場から日本語における「フォリナー・トーク」を母語話者が持つ1つのレジスターとして解明する研究はほとんど行われて来なかった。この国内の研究については第3章で述べる。

さらに Ferguson(1983)はアメリカ英語におけるスポーツの実況中継でのアナウンサーの独特な喋り方を分析し、統語論的な特徴をまとめて一つのレジスター、「スポーツアナウンサー・トーク(sports announcer talk)」であることを明らかにした。それと同時にこの研究はレジスターの方法論を提示したのもでもあり、その後のレジスター研究にしばしば引用される。これは、ファーガソン自身も80年代当時の研究の動向をまとめる中でこの研究の位置付けは、(1)アメリカ英語の中で、変種の多様性がどんなに関心あるものであるかを示し、(2)このレジスターや他の英語におけるレジスターの変種のさらなる研究が行われることを喚起するためであり、さらに(3)英語や他の言語の構造が、その言葉が使用される異なる機会やコミュニケーション機能にあわせて調整される際のプロセスを含む広大なレジスタ

ーの変種のほんの一片を記すため、の3つの目的を担ったものであると説明している(Ferguson 1994、下線部は筆者)。つまり、日本語にもそれが使われる日本社会の下、異なる機会やコミュニケーション機能によって特徴的なレジスターの変種が存在することが考えられる。世界中の異なる言語、社会の中にそれぞれフォリナー・トークが存在するが、それは少しずつ異なるものであり、各言語におけるそうした特徴を集めると世界規模でのフォリナー・トークの鳥瞰図が出来上がる。筆者が知る限りにおいてはそうした地図は未だ存在していないが、もし存在していたらそれを眺めることで、例えばアジア地域など文化背景が近い言語間では普遍的な特徴が見られたり、言語体系の相違とフォリナー・トークの特徴とで何らかの発見があるかもしれない。そして、ファーガソンが明らかにした「アメリカ英語母語話者」のフォリナー・トークは多種多様な言語に見られるフォリナー・トークの「ほんの一片」に過ぎないものであるかもしれない。

また、ファーガソンは数々のレジスター研究を通して、レジスター分析のアプローチとして3段階を経る手法を示した(Huebner 1996)。まず、そのレジスターが出現する状況、機能の特徴を分析し、次に新しいレジスターなのか、あるいはすでにあるレジスター内の変種であるのか、その両面について統語論的な観点から慎重に現象を分析した上で結論付けていった。その結果、フォリナー・トークやベビー・トーク以外にも、“amateur radio operators” “academic note taking” “courtroom speech”など、様々な場面、状況において人間が無意識に行っている言語の営みにある普遍的特徴を明らかにした。

1987年のスタンフォード大学における「Register, Genre and Style」という講演原稿をまとめた Ferguson(1994)では、人々が使用する言葉の変種について以下の3種に分類している。

(1) Dialect variation(方言変種) :

人々の出身や所属する社会集団によって変わる変種を指す。

(2) Register variation(レジスター変種) :

目上か目下か、同じ性か異なる性か、などの要因、あるいは改まった場所か否か、その場面においてどのような参加状態か、によって変わ

る変種を指す。

(3) Genre variation(伝達様式変種) :

あるメッセージがどのような媒体を通して伝えられるかによって変化するもの、例えば詩や新聞記事、教会での説教など、それによって変わる変種を指す。

レジスターに関する理論は、もともと英国の言語学、特にファース(J.R. Firth)学派によって展開され、Halliday(1964)でレジスターの定義に関する研究が提唱されたものである。しかしファーガソンは当時のレジスターの研究ではまだ確固たる研究成果をまとめた教科書や専門のジャーナルが発行されていない、つまり、まだ研究分野として確立していないことを指摘し(Ferguson 1994 : 16)、その確立のために様々なレジスターを明らかにしながら、レジスター研究の方法論を提起することを試みている。

このようにファーガソンは、レジスター研究、特にフォリナー・トークを含む人々の言語使用の変種の研究を確立するために、様々な言語変種の研究を続けてきた。彼は変種を、話し手が自分の話し方を評価し、より「良い」、より「美しい」、より「正しい」、より「適切」な話し方を目指して試みることによって生まれるものであり、それは人々の可視的な言語使用の背景にある人間の本能的な言語の営みであると捉え、その営みに対する彼自身の畏敬を込めた驚きを示す文章もまた、論文中にしばしば登場する。ファーガソンの研究からは、人々が日常場面で使用している人間の言語行動の深淵部分への着目、およびその事実を顕在化することの重要性を後続の研究者たちへ伝えようとしているように感じられる。

## 2.2 ファーガソンによるフォリナー・トークの定義

ファーガソンが「フォリナー・トーク」と言う新語を初めて使用したのは、1968年4月にジャマイカで開催されたピジンとクレオール国際会議での発表原稿の中であった。その後、Ferguson(1971)においてあらためてその概念を発表した。ここでは同じ簡略化現象を示すレジスターの中において、ベビー・トークやピジンと比較し、英語話者が、英語が良くできない人に対して使用する話し方をフォリナー・トークと呼び、人間がもつ普遍的な言語の一つであることを示唆している。その後、Ferguson(1981)では、「フォリナー・トーク」と言う用語の説明に次のような記述が見られる(下線部は

筆者)。

Similarly, the term 'foreigner talk' in my interpretation referred to ①the particular register used primarily to address foreigners i.e. people who do not have full native competence(or possibly any competence at all) in one's language. Like 'baby talk' the new term was ambiguous, suggesting also ②the kind of language used in secondary and displaced functions : it may be used to report the speech of foreigners or to represent an aberrant variety of speech. (Ferguson 1981 : 10)

「同様に、『フォリナー・トーク』という用語は、本来は①主に外国人に対して、例えば当該言語について十分な理解力がない人々に対して使用するレジスターであった。『ベビー・トーク』という新しい用語が曖昧であったように、これも②外国人が話している様子を伝えたり、普通とは異なる形で話した様子を再現したりする場合にも使用される機能を持つものとして二次的にも用いられることもある。」  
(本稿筆者訳)

ここではフォリナー・トークを母語話者の1つのレジスターとし、もともとは「主に外国人に対して、例えば当該言語について十分な理解力がない人々に対して使用するレジスター」(下線①)であったものがさらに発展して「外国人が話している様子を伝えたり、普通とは異なる形で話した様子を再現したりする場合にも使用される機能を持つものとして二次的にも用いられることもある」(下線②)とあるように、Ferguson(1971)で最初に明らかにされたフォリナー・トークが10年の研究の歳月を経るうちに単に外国人に向けて簡略化した話し方をするもののみを指すのではなく、対外国人場面以外においても外国人訛りでの発話も含めて「フォリナー・トーク」の範疇に入れた研究が行われるようになったと述べている。今日、国内の主な辞書類では、「フォリナー・トーク」の項で「ある言語の母語話者が、その言語に堪能ではない外国人に話しかける時によく使う発話(Richards, Platt and Weber 1985 山崎・高橋・佐藤・日野訳 1988 : 139)と記述されていることが多い。しかし、欧米においては一時期、「フォリナー・トーク」の定義を広義に解釈し、実際に外国人に向けて発せられるものだけでなく、外国人が話している様子を伝えたり、その外国人の話し方について

でもフォリナー・トークの研究として行われていたのである。そこではコミュニケーションの媒体を必ずしも音声を伴う「話し言葉のみ」には限定せず、文字と言う媒体によって社会に向けて発せられた「話」もまたフォリナー・トークの一形態として包括されていた。ファーガソン自身はそうした研究を行っていないが、Ferguson(1981)でその種の研究を容認している。このことは「フォリナー・トーク」の現象が様々な角度から広く研究されていくことを彼自身が望んでいたことを窺わせる。

現在、日本国内の通念的な定義では、フォリナー・トークは「音声を伴って話す」行為におけるコミュニケーションでの現象と広く捉えられている。そのため、例えばメモや手紙の場合のような「書く」行為を媒体とした場合に見られる現象に対し、従来のフォリナー・トークとは区別して「フォリナー・ライティング」(大平 2002<sup>2</sup>)と言う用語が使われることもある。また、コミュニケーション手段として新たに台頭してきた電子メールにおいても、当該言語でのコミュニケーション能力が十分ではない読み手に対し母語話者が母語の特殊な使い方をしている現象が見られることが報告されている(徳永 2003)が、いずれもファーガソンを出発点としたフォリナー・トークの定義をもとに広義のフォリナー・トークとして捉え直すことによってフォリナー・トーク研究の新しい流れとして発展していける可能性を秘めるものである。しかしながら、今現在までのところ、「日本語のフォリナー・トーク」の解明が十分に行われていないため、国内のフォリナー・トーク研究について定義や用語の解釈に研究者間で見解に違いがあることもまた現実である。こうした揺れについても日本語のフォリナー・トークそのものを解明する研究が行われていくことによって一つの方向へと収束していくものと思われる。

### 2.3 ファーガソン以降のフォリナー・トーク研究

フォリナー・トーク研究を概観した Ferguson(1981)によると、80年代初頭のフォリナー・トーク研究は「レジスターに関する考え方」と「簡略化」と言う2つの視点での研究に大別され、さらに「フォリナー・トークの現象について言及したもの(例えば Corder 1975, Larsen-Freeman 1976 など)」と「研究に関する理論や方法について言及したもの(例えば Corder and Roulet 1977, Hatch, Shapira and Gough 1978, Henzl 1974 など)」に分かれる。

このうち、Freed(1981)は母親から子供へ向かう発話、母語話者からそれぞれ英語初級話者、英語上級話者への発話、そして母語話者同士の発話の4種類150の会話データを分析し、フォリナー・トークとベビー・トークとは統語論的には似ているが、前者が情報を確認する機能がもとになっているのに対し、後者は、相手の発話を引き出すことが目的となっていることを明らかにし、フォリナー・トークとベビー・トークとの相違点を実証的なデータに基づいて確認した。

その他の研究として子供のフォリナー・トークに焦点を当てた Katz(1981)、Clyne(1981)の研究、および対話相手との関係に焦点を当てた Snow, van Eaden and Muysken(1981)の研究はその当時のフォリナー・トークの多様性を探るものであった。Muhlhausler(1981)の研究は成人の母語話者を対象として、パプアニューギニアのピジン語(tok pidgin)の中でのフォリナー・トークを解明しようとしたもので、他の研究とは研究視点が異なる。

また、先述の「フォリナー・トーク」と言う用語を拡大解釈した研究例としては Valdman(1981)がある。彼は会話ではなくフィクションの文章の中で、どのようにフォリナー・トークが使用されているか、またその背景に焦点を当てながら、社会学的な見地で研究を行った。

Valdman のような視点の研究はその後の主流を成すものではなかったが、今後、新たに開発されていく期待が持てるものである。例えば外国人役を演じる母語話者の俳優が、外国人性を顕現するために用いる「外国人的な話し方」や、それが書かれたシナリオ、原本小説の記述なども、日本語のフォリナー・トークの分析対象として考えられよう。ある国の外国人を表現する際、音声、言語面でのどのような特徴を使用するのか、と言った視点での研究は、フォリナー・トークを新たな切り口から解明する試みとして興味深い。

### 2.4 第二言語習得研究者によるアプローチ

フォリナー・トークが第二言語習得の研究者によって注目を浴びようになった背景には、相互作用・相互交渉(interaction)が言語学習に効果があるとする理論によるところが大きい。1960年代、70年代の第二言語習得観は、学習者を「言語生成機構」と捉える行動主義者と「偉大な言語の創造者」と捉える生得論者に二分されていた。これに対し第三番

目の言語習得観として「相互交渉論者」が現れた。相互交渉学習理論(Interactionist Learning Theory)は、言語環境と言語発達における学習者の心的メカニズムとの相乗効果に重きをおいた。こうした流れのなかで、Corder(1967)は目標言語をただ大量にインプットするのみでは必ずしもその言語の習得にはつながらず、インテイクが必要であると提唱した。この考えはやがて「簡略化されたインプット仮説」へと発展していった。この流れのなかで Ferguson(1971)を初めとするフォリナー・トークやその他の簡略化された言語現象が注目されるに至ったのである。

Hatch(1978)は、言語習得において自然な文法習得順序(natural order)は、学習者との会話がいかにか構成されるかに左右され、幼児は自分が理解出来る話題かどうかによって吸収するインプットが調整されるとした。また同様に、言語能力が十分ではない成人学習者の場合にも母語話者が会話の展開を維持するために相手の言語能力に合わせることから、それは自然な文法習得順序(order of acquisition)に沿ったものになるとし、母語話者が会話を維持するために用いるフォリナー・トークを非母語話者の理解力を高めるものとして注目した。

そして Long(1981)は、母語話者の修正された言語が学習者にとって理解しやすいインプットとなるとし、会話において以下にあげるフォリナー・トークの技術が学習者の負担を軽くすると主張した。

1. 母語話者が非母語話者の発言の残りの表現を助け、協同的に会話を行うことが保障される
2. 母語話者が自分自身が発した質問へ答え、相手には修辭的な質問をする
3. 母語話者が疑問文の形で質問をし、その形で会話が維持されていく
4. 母語話者は会話の問題が発生するのを避け、ミスコミュニケーションを修正するために頻繁に明確化しようとする

その後、Krashen(1982)もまた彼のインプット仮説の中で第二言語習得の順序に触れ、子供の第一言語習得の際、母親などから調整されたインプットを受けるのと同様、i+1 となるようなインプットを受けることが必要であるとし、その際の最適なインプットとしてフォリナー・トークの他、ティーチャー・トーク、中間言語(interlanguage talk<sup>3</sup>)の3種類を挙げた。

Krashen では Hatch(1979)を引用し、簡略化されたインプットの言語学的側面として、3つの特徴を挙げている。

1. ゆっくりとした調子ではっきり発音して伝えることにより、学習者はより言葉を理解しやすくなり、理解する過程の時間がとれる
2. スラングなどでなく、一般的によく使用される語彙が使用され、イディオムはあまり使用されない
3. 簡単な構造による短い文である

やがて母語話者の調整されたインプットに対し、Swain(1985)は一方向コミュニケーションよりも双方向コミュニケーションにおいての方が、必要な言語調整としてのフィードバックが母語話者より行われるため言語習得が進むという主張した。これはその後、Gass and Varonis(1985)、Pica(1988)らの母語話者と非母語話者との意味交渉の分析へと発展していった。日本語のフォリナー・トークが明らかにされた当時、海外では第二言語習得研究分野において「簡略化されたインプット」「理解可能なインプット」としてフォリナー・トークが注目され、研究の対象となっていた。このことが日本国内におけるフォリナー・トーク研究へ大きく影響する結果となったのである。

### 3. 日本語のフォリナー・トーク研究

#### 3.1 スクータリデスの研究

日本語におけるフォリナー・トークの存在はスクータリデス(1981)で初めて確認された。スクータリデスはオーストラリア在住の日本人 10 名と現地日本語学習者とのインタビュー会話を分析し、日本語のフォリナー・トークには他言語と共通した特徴と日本語独自の特徴があることを明らかにした。

スクータリデスは日本語のフォリナー・トーク研究の意義について、「言語習得過程に注目しながら、フォリナー・トークの研究を行うことにより、この結果から得られるであろう新しい知識に基づいて、外国語教育の在り方が多くの面で改善されることが期待される」(1981 : 54)とし、これに続く研究の課題として以下を挙げた。

- 1) 母国語話者<sup>4</sup>は「簡略化」をどのようなものと

- して知覚し、実際にどのように使っているのか
- 2) どのようにして、その言語目録を身につけるか
  - 3) 聞き手の言語能力に合わせて「簡略化」の程度を適応させる時、どのような規則が用いられるか
  - 4) フォリナー・トークのバリエティを選択するのに影響するのは、聞き手のどのような言語能力の特徴か

上記は 80 年代初頭のフォリナー・トークを母語話者のレジスターの一つとして解明しようとした海外のレジスター研究の視点に近いものである。この種の日本語のフォリナー・トーク自体の解明を試みた研究は、スクータリデス(1981)の後は、ロング(1992)に見られる。その間の研究では第二言語習得研究分野でフォリナー・トークの簡略化現象に注目した研究が行われていたことに強い影響が見られ、英語母語話者のフォリナー・トークと同様の簡略化現象が見られることを前提とした上で、「簡略化されたインプット」、あるいは「理解可能なインプット」として日本語学習者の言語習得へどのような影響があるかを検証した研究が多く報告された。本稿の最後に資料として付した「日本語のフォリナー・トークに関する論文一覧」に示されるようにその流れは 90 年代後半まで続いて今に至る。

一方、Skoutarides(1988)では、オーストラリア在住の日本人ビジネスマン3名のフォリナー・トークについて敬語、文法、語彙面での、個々の修正能力(corrective competence)に視点を置き、言語管理理論(Neustupny 1985)を用いた分析を試みた。そして、母語話者の英語能力等の個別的要因によって自らの発話の「訂正」<sup>5</sup>の方法に個人差が見られると報告した。

### 3.2 特徴に関する研究

前述のようにスクータリデス(1981)は、オーストラリア在住の日本人とそこで日本語を学習している学生との会話を分析した結果をもとに、日本語におけるフォリナー・トークの存在を紹介した。ロング(1992)は、自らが日本において外国人であることを利用して、道端で出会った見知らぬ日本人話者(37人)に道を尋ね、その回答を録音し、文字化したものと、このスクータリデス(1981)のイ

ンタビュー会話の両データを基に、日本語母語話者の外国人に対する言語行動の特徴を一覧にまとめた。本稿では、ロング(1992)に修正を加えたロング(1995)よりその一覧を次ページ表1に引用する。

この表中最後の「2. フォリナー・トーク無使用型：b. 生活言語(方言)の使用」に関連する研究として備前(1996)がある。これは現代方言研究のなかでも国内の移住者と言語変容実態との関連を明らかにする一連の研究であり、「移住者」の一種として在日外国人をその範疇に含めて調査したものである。「日本人の意識とフォリナー・トーク」の章では、「外国人と話す場合には方言的な要素を避けて全国共通語的な表現が多くなる(備前 1996 : 351)」との予測のもと、近畿地方35大学約2,800名の日本人学生を対象にその地方では使用が多いとされる条件法「～たら」の使用について記述式で調査を行った。その際、被験者に外国人(台湾出身)と日本人との録音会話を聞かせることによって状況設定を行っている。その結果、地元出身者はこの地域に特有の方言形使用を止め、全国共通語形への切り替えが行われると言う結果を得た(備前 1996 : 352)。その一方で、他地域出身者は居住地域の方言である「～たら」の使用を特に避けない、つまり方言使用に関するフォリナー・トークの現象が見られないと言う結果も報告されている。今後、実際の会話データを分析することによる研究が必要であるが、外国人に対する方言使用がその土地の方言で育った者(地元出身者)と現在生活語として使用しているものの他の方言地域で育った者(移住者である他地域出身者)とで差異が見られたことは、興味深い。これはフォリナー・トークの出現に関する研究に貢献すると同時に、今後、方言研究と言う言語を扱う異分野においても日本語のフォリナー・トークが解明されていく可能性を期待させるものである。

### 3.3 出現条件に関する研究

スクータリデス(1981 : 53)の定義ではフォリナー・トークを「話し手が聞き手の言語能力にある限界を感じ、それに適応させるために簡略化したもの」と紹介している。本章 3.1 で述べたように、スクータリデスは日本語のフォリナー・トークについて、母語話者はどの時点で明らかに「言語能力に限界がある」と知覚できるのか、また、知覚

表 1 日本語における対外国人行動

(ロング 1995:11 より引用)

<p>I. 無返答型</p> <p>A. 無言 ①</p> <p>B. 無提供 ②</p> <p>II. 返答型</p> <p>A. 他言語の(発話ごとの)使用 ③</p> <p>B. 日本語の使用</p> <p>1. フォリナー・トーク(外国人相手談話)使用型</p> <p>a. 語彙面</p> <p>(1) 臨時借用語の使用 ④</p> <p>(2) 訳語の使用 ⑤</p> <p>(3) 外来語の頻用 ⑥</p> <p>(4) 釈義 ⑦</p> <p>(5) 同義語による言い換え ⑧</p> <p>b. 文法面(文法の簡略化)</p> <p>(1) 短い文の頻用 ⑨</p> <p>(2) 格助詞の省略 ⑩</p> <p>(3) 複雑な文構造の回避 ⑪</p> <p>(4) 敬語・丁寧体の回避 ⑫</p> <p>(5) 指定表現「ダ」の省略 ⑬</p> <p>c. 音声面(聞き取りやすい発音)</p> <p>(1) 話すスピードの減速 ⑭</p> <p>(2) 拍を区切った発音 ⑮</p> <p>d. 談話面</p> <p>(1) 語・節の繰り返し ⑯</p> <p>(2) 明確化の要求 ⑰</p> <p>(3) 理解の確認 ⑱</p> <p>(4) 現在の時間・場所の話の頻出 ⑲</p> <p>e. 非言語行動(ジェスチャーの頻用) ⑳</p> <p>2. フォリナー・トーク無使用型</p> <p>a. 全国共通語の使用</p> <p>b. 生活言語(方言)の使用</p>
--

した後、フォリナー・トークのレジスターを使用するかどうかの判断はどのようなメカニズムで行われるのか、といった課題の解明を今後の研究の方向として示した。

オストハイダ(1999:89)は、「外国人=西洋人(主に白人)」の立場から日本人の対外国人言語行動の考察や分析が行われていることに疑問を抱き、日本人が日本語を母語としない様々な国や人種(外見的特徴)の外国人に対して用いる言語行動を比較し、研究する必要性を主張した。彼は日本語母語話者と中国人日本語学習者との初対面の会話6組、各10分を分析し、中国人に対しては「筆談」と言う調整ストラテジーが見られ、言い換えについては外来語による言い換えより日本語の漢語による言い換えの方が多く見られることを明らかにした。また量的調査では、日本語母語話者220人に対し「外国人とのコミュニケーションに関する経験と意識」を、非母語話者115人に対しては「日本人とのコミュニケーションに関する経験」を調べ、非母語話者を対象としたケーススタディと合わせて考察した。その結果、母語話者の対外国人言語行動は、聞き手である外国人の言語能力における限界とは限らず、外国人の人種や国籍にも拠ること、つまり対外国人場面の言語行動を左右するのに、「言語外的条件」が存在することを明らかにした。これはそれまでのアメリカ英語母語話者のフォリナー・トークと日本語母語話者のものが必ずしも同じものではないことを示唆するものである。スクータリデス(1981)は、どの言語の母語話者にも共通する普遍的な営みとしてのフォリナー・トークが日本語母語話者にもレジスターとして存在することを示した。しかし、その特徴はファーガソンが示唆したように(前章2.1)その言葉が話される社会や文化背景などによって異なることは想像に難くない。オストハイダ(1999)はこの可能性を実証したものであると言える。

### 3.4 社会心理的アプローチにおける評価の研究

Ferguson(1975)はフォリナー・トークを使用する心理的背景に、見下したり、その言葉を学習する能力に欠けていると見なすことにつながるネガティブな態度について指摘した。ファーガソンによって人々の言葉がどのように使用されているのかが分析され、その現象がレジスターとして明らかにされつつあったのと同時代、人々の言語使用について社会



心理的な側面から解明しようと試みた研究者達があった。社会心理学的アプローチである「発話適応理論 (Speech Accommodation Theory)」に基づく派で、これはイギリスの社会心理学者の Howard Giles がその中心的な研究者として挙げられる(Beebe 1987)。

「適応(accommodation)」とは、「話し相手の話し方に近づくように、あるいは遠ざかるように自分の話し方を変えること」(Richards, Platt and Weber 1985 山崎・高橋・佐藤・日野訳 1988 : 2)であり、近づく方の変化を「収斂(convergence)」、逆に遠ざかる方の変化を「分岐(divergence)」と言う。Giles and Smith(1979)を初め、この適応理論(accommodation theory)の発話の分岐、収斂に注目し、言語使用における変異や習得の研究に応用して理論を構築したものが発話適応理論であった。

さらにコミュニケーション場面における適応現象を取り上げ「コミュニケーション適応理論 (communication accommodation theory)」(Giles and Wiemann 1987)に基づいた研究も現在まで続けられている(例えば Giles et al. 1991 など)。フォリナー・トークはこうした発話適応理論のなかでも説明されている。

日本語のフォリナー・トークについて、適応理論の視点をを用い、日本語母語話者がどのように評価するかを分析したものに Ross and Shortreed(1990)がある。これは、英語を学習している日本人大学生を対象に標準的な日本語(standard Japanese)、フォリナー・トーク、英語へのコードスイッチ(code-switching to English)によって非母語話者へ応答している3種類の短い会話に対する評価について行ったものである。結果の1つに、女性は男性に比べ、コードスイッチやフォリナー・トークなどの簡略化を「親切で協力的なストラテジーだ」と評価する傾向があった。ここではフォリナー・トークに対する評価に関して性差があること示している。Ross and Shortreed は日本人男性が簡略化した発話に対して低い評価をすると言う結果について、Miller(1982)を参照にし、日本社会における文化的な背景が影響したことが考えられると考察している<sup>6</sup>。フォリナー・トークの使用に対する評価の研究は、日本語母語話者の言語使用に関する潜在意識を明らかにするものであるが、それが実際のフォリナー・トークの使用にどのような影響を与えているのかと言ったフォリナー・トークの「意識と行為」を結びつけた研

究は未だ行われていない。今後、社会心理の分野でその解明がさらに進められ、将来的にはフォリナー・トークをめぐる研究分野を超えた連携でさらに多方面からの解明が進められることを期待したい。

ロング(1995)はフォリナー・トークの特徴を言語形式的(formal)<sup>7</sup>なもの(例えば助詞の省略、語・節の繰り返しなど)と機能的(functional)なもの(例えば、繰り返ししたり、ゆっくり話したりなど)に二分し、それぞれの特徴を含んだ録音会話を日本語教育関係の授業を受講中の日本人女性 89 人と日本語を学習している中級クラス英語圏 12 名に評価させた。その結果、言語形式的特徴(この研究では漢語、和語、外来語の使い分け)に関しては、どの言語形式を使うかの評価に差はなかったが、発話のなかに繰り返しや理解の確認、話す速度がゆっくりであるかどうか、と言った機能的特徴の有無がその話者に対する評価を大きく変えることを明らかにした。また、同一話者が話しても、フォリナー・トークの特徴を使用することによって「親切で性格が良い」と好意的に評価されている(ロング 1995)。ロングの被験者は全員女性と言うこともあり、先述の Ross and Shortreed(1990)の結果が示すように、女性は発話を調整することに肯定的に評価をする傾向にあるならば、ロングで得られた結果は、調整の様子が明らかに分かる機能的特徴による違いの方がより大きく評価されたと解釈することも可能である。

以上、日本語におけるフォリナー・トーク研究について、現象に関する知見を中心に概観するとともに、今後の研究の方向について幾つかの提案を試みた。ここで取り上げなかったその他の研究論文や寄稿文については、巻末の資料を参照されたい。

#### 4. 終わりに

本稿では、フォリナー・トークについて、その最初の発見者でもあるファーガソンのレジスター研究を出発点とし、海外における研究の流れ、次いで日本国内における研究について概観してきた。その結果、まず、国内の研究において日本語のフォリナー・トークは、レジスターとしての観点からその特徴が明らかにされて来なかったことがわかる。日本語のフォリナー・トークにおける一般的な特徴については、前章 3.2 で紹介したようにロング(1992)がスクータリデス(1981)で分析されたデータと自らのデータとの共通点を整理し、さらにそれを他の言語

における対外国人話者のコミュニケーション様式との類似点から普遍的な傾向としてまとめている。今後は、レジスター研究の方法論を示した Ferguson(1983)を参照にして、さらに大量のデータの分析をもとに他の言語と比較することによって共時的、普遍的なフォリナー・トークの特徴を明らかにして行く必要がある。

一方、オストハイダ(1999)が指摘するように日本人は外国人の外的条件によってフォリナー・トークの出現に違いが見られる。これは、日本社会における外国人への期待やイメージ、と行った社会心理的な要因に依拠することが考えられる。同じ外国人でもその存在が社会においてどのような位置付けであるかにより、そのグループとのコミュニケーション方略にも差異が出てくる。国によってあるいは社会によっては「外国人」ということ自体に付加的な意味が加えられ、それが人々の言語行動に影響を与えることもあり得るのである。つまり、フォリナー・トークはアメリカ英語以外の言語にも存在する普遍的なものである一方、それぞれの言語、その言語が話される社会によって差異があることが予想される。これらはファーガソンが行ったようなレジスター研究を日本語母語話者のフォリナー・トークにおいても行うことによって初めて「日本の社会文化背景において母語話者が使用するレジスター」としてのフォリナー・トークの全容が明らかに出来ると考える。

21世紀に入り、ますますグローバル化が進む中で人々の対外国人場面でのコミュニケーションもますます多岐にわたるようになった。そのなかで、日本語母語話者が使用するフォリナー・トークは、日本語が使われる社会や文化を映し出す一つの窓でもある。すでに明らかにされている他言語のフォリナー・トークに比して、日本語にはどのような特徴があるのか。そしてそれは時代ともにどのような変化を遂げているのか。フォリナー・トークそのものを日本語母語話者のレジスターとして明らかにしていくことは現代の研究者の責務であると考えられる。

#### 注

1. このベビー・トークとの決定的な違いについては、その後、Freed(1981)で実証された。
2. 「フォリナー・ライティング」の用語は鄭(1999)によるものであるが、本格的な研究は大平(2002)で始まった。しかし、ここで述べるようにこの用語の使用については研究者間で広く認知されているとは言い難い。

3. Krashen(1982: 24)では、母語話者の調整によるフォリナー・トークやティーチャー・トークの他、同じ言語学習者同士で使用される言葉も簡略化された言語コードであるとして挙げられている。
4. スクータリデス(1981)での記述のまま引用した。「母語」と「母国語」の使い分けの議論もあるが、本文では「native language」の訳として「母語」を使用する。
5. 言語管理理論においては、相手の理解を認識して自分の発話を調整することを「訂正」と呼ぶ。
6. この部分は原文では次のように説明されている。‘This result indirectly supports a cultural stereotype of the Japanese male as taciturn and cautious in encounters with non-Japanese, preferring to rely on his native language rather than risk loss of face in using a foreign tongue.(Ross and Shortreed 1990: 141-142)’
7. ロング(1995)では、言語形式的なものをさらに不自然(非文法的な)な範疇的(categorical)なもの、不自然ではないが、非母語話者を相手にすると著しく増加する段階的(gradient)なものに二分している。

#### 参考文献

- 大平未央子 (2001) 「フォリナー・トーク研究の現状と展望」『言語文化研究』27, 大阪大学言語文化部 335-354.
- 大平未央子 (2002) 「日本語のフォリナー・ライティングにおける社会言語的調整—ネイティブ・ライティングとの比較および調整のメカニズム—」『言語文化研究』28, 大阪大学言語文化部 211-228.
- オストハイダ、テーヤ (1999) 「対外国人行動と言語外的条件の相互関係」『日本学報』18, 大阪大学文学部 89-104.
- 坂本正・小塚操・架谷真知子・児崎秋江・稲葉みどり・原田知恵子 (1989) 「『日本語のフォリナー・トーク』に対する日本語学習者の反応」『日本語教育』69, 121-146.
- 志村明彦 (1989) 「日本語の Foreigner Talk と日本語教育」『日本語教育』68, 204-215.
- スクータリデス、アリーナ (1981) 「日本語におけるフォリナー・トーク」『日本語教育』45, 53-62.
- 鄭恵允 (1999) 「書きことばによる『接触場面』における母語話者側の言語的調整—『フォリナー・ライティング』の概念形成に向けて」『第4回社会言語科学会研究大会予稿集』88-93.
- 徳永あかね (2003) 「Foreigner Writing における語彙調整—日本人学生・留学生のメール交換より—」『神田外語大学紀要』15, 233-247.
- 川島淳夫他編(1994)『ドイツ言語学辞典』紀伊国屋書店
- 備前徹 (1996) 「在日外国人と方言」小林隆他編『方言の現在』明治書院, 342-369.
- ロング、ダニエル (1992) 「日本語によるコミュニケーション—日本語におけるフォリナー・トークを中心に—」『日本語学』12, 明治書院 24-32.

- ロング、ダニエル (1995) 「フォリナー・トークに対する意識」『日本語教育における社会言語学的基盤』文部省科学研究費総合(A)研究成果報告書 11-24.
- Beebe, L.M. (1987) *Issues in second language acquisition*, Heinle & Heinle. (島岡 丘監修 1998 『第二言語習得の研究－5つの視点から』大修館書店)
- Clyne, M. (1981) 'Second generation' foreigner talk in Australia, *International Journal of the Sociology of Language*, Vol.28, 69-80.
- Corder, S. P. (1967) The significance of learner errors, *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-169.
- Corder, S. P. (1975) The language of Kehaar, *Work in Progress*, 8, 41-52.
- Corder, S. P. and Roulet, E. (1977) *The notions of simplification interlanguages and pidgins and their relation to second language pedagogy*, Geneva: Librairie Droz
- Ferguson, C. A. (1959) Diglossia, *Word*, 15, 325-340.
- Ferguson, C. A. (1964) Baby talk in six languages, In J.A.Gumperz and D.Hymes (Eds.), *The Ethnography of Communication*, Special Issue of *American Anthropologist*, 66,103-14.
- Ferguson, C.A. (1971) 'Absence of copula and the notion of simplicity; normal speech, baby talk, foreigner talk, and pidgins, In D. Hymes (Ed.), *Pidginization and creolization in language*, Cambridge: Cambridge University Press, 141-150.
- Ferguson, C.A. (1975) Toward a characterization of English foreigner talk, *Anthropological Linguistics*, 17, 1-14.
- Ferguson, C. A. (1981) 'Foreigner talk' as the name of a simplified register, *International Journal of the Sociology of Language*, 28, 9-18.
- Ferguson, C. A. (1983) Sports announcer talk: Syntactic aspects of register variation, *Language in Society*, 12, 153-172.
- Ferguson, C. A. (1994) Dialect, register, and genre: Working assumptions about conventionalization, In D.Biber and E. Finegan (Eds.), *Sociolinguistic perspectives on register*, Oxford: Oxford University Press, 15-30.
- Freed, B. (1981) Foreigner talk, baby talk, native talk, *International Journal of the Sociology of Language*, 28, 19-40.
- Gass, S. M. and Varonis, E. (1985) Variation in native speaker speech modification to non-native speakers, *Studies in Second Language Acquisition*, 7-1, 37-58.
- Giles, H and Smith, P M. (1979) Accommodation theory: Optimal levels of convergence, In H.Giles and R.N.Clair (Eds.), *Language and social psychology*, Oxford: B. Blackwell, 45-65.
- Giles, H. and Wiemann, J. (1987) Language, social comparison, and power, In S.Chafee and C.R.Berger (Eds.), *Handbook of communication science*, CA: Newbury Park, 350-384.
- Giles, H., Coupland, N. and Coupland, J. (1991) Accommodation theory: Communication, context, and consequence, In H. Giles, N. Coupland and J. Coupland (Eds.), *Contexts of accommodation : Developments in applied sociolinguistics*, New York: Cambridge University Press, 1-68.
- Halliday, M. A. K., Micintosh, A. and Strevens, P. (1964) *The linguistic sciences and language teaching*, London:Longman. (増山節夫訳注 1977 『言語理論と言語教育』大修館書店)
- Hatch, E. M. (1978) Discourse analysis and second language acquisition, In E. M. Hatch (Ed.) , *Second language acquisition: A book of readings*, Rowley, Mass: Newbury House.
- Hatch, E. M. (1979) Apply with caution, *Studies in Second Language Acquisition*, 2-1, 123-143.
- Hatch, E., Shapira, R and Gough, J. (1978) 'Foreigner-talk' discourse, *ITL: Review of Applied Linguistics*, 39-40, 39-60.
- Huebner, T. (1996) Introduction, In Huebner (Ed.), *Sociolinguistic perspectives -Papers on language in society:1959-1994*, New York: Oxford University Press, 3-15.
- Henzl, V. M. (1974) *Linguistic register of foreign language instruction*, *Language Learning : A Journal of Applied Linguistics*, 23-2, 207-222.
- Katz, J. T. (1981) Children's second-language acquisition: The role of foreigner talk in child-child interaction, *International Journal of the Sociology of Language* , 28, 53-68.
- Krashen, S. D. (1980) The theoretical and practical relevance of simple codes in second language acquisition, In R. Scarella and S. D.Krashen (Eds.), *Research in second language acquisition*, Rowley, MA: Newbury House, 7-18.
- Krashen, S. D. (1982) *Principles and practice in second language acquisition*, Oxford: Pergamon.
- Muhlhausler, P. (1981) Foreigner talk : Tok Masta in New Guinea, *International Journal of the Sociology of Language* , 28, 93-114.
- Larsen-Freeman, D. (1976) An explanation for the morpheme acquisition order of second language learners, *Language Learning*, 26, 125-134.
- Long, M. H. (1981) Input, interaction and second language acquisition, In Winitz, H (Ed.), *Annals New York Academy of Sciences*, 379, 259-278.
- Miller, R. A. (1982) *The Japanese language: The myth and beyond*, Tokyo: John Weatherhill Inc.
- Neustupny, J. V. (1985) Problems in Australian - Japanese contact situations, In J. B. Pride (Ed.), *Cross-cultural encounters: Communication and mis-communication, Melbourne, Australia: River Seine Publications*, 44-63.
- Pica, T. (1988) Negotiated input as an aid to learner output, *Language Learning*, 38-4, 471-493.
- Richards, J., Platt, J. and Weber, H. (1985) *Longman dictionary*

of applied linguistics. (山崎真穂・高橋貞雄・佐藤久美子・日野信行訳 1988『ロングマン応用言語学用語辞典』南雲堂)

Ross, S. and Shortreed, I. M. (1990) Japanese foreigner talk : Convergence or divergence?, *Journal of Asian Pacific Communication*, 1-1, 135-145.

Skoutarides, A. (1988) Individual variation in Japanese foreigner talk, In J.V.Neustupny, and Y.Sugimoto (Eds.) , *Working papers of the Japanese studies centre*, 12, 1-54.

Snow, C. E., van Eaden, R. and Muysken, P. (1981) The interactional origins of foreigner talk : Municipal

employees and foreign workers, *International Journal of the Sociology of Language*, 28, 81-92.

Swain, M. (1985) Communicative competence: Some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development, In S.Gass and C. Madden (Eds.) , *Input in second language acquisition*, Rowley, Mass: Newbury House, 235-253.

Valdman, A. (1981) Sociolinguistic aspects of foreigner talk, *International Journal of the Sociology of Language* , 28, 41-52.

とくなが あかね/神田外語大学 留学生別科  
akane@kanda.kuis.ac.jp

稿末資料 日本語のフォリナー・トークに関する論文一覧 (1981~2003) 発行年次順

No.	著者	年号	論文名	掲載雑誌・書名
1	スクータリデス, アリーナ	1981	外国人の日本語の実態 (3) 日本語におけるフォリナー・トーク	『日本語教育』45号、53-62.
2	J.V. ネウストプニー	1981	外国人の日本語の実態 (1) 外国人場面の研究と日本語教育	『日本語教育』45号、11-24.
3	Skoutarides, Alina	1988	『Individual Variation In Japanese Foreigner Talk』	J.V. Neustupny and Y. Sugimoto(Ed.) Working Papers fo the Japanese Studies Centre No. 12, 1-54.
4	坂本正、他	1989	「日本語のフォリナー・トーク」に対する日本語学習者の反応	『日本語教育』第69号、121-146.
5	志村明彦	1989	日本語のForeigner Talkと日本語教育	『日本語教育』68号、204-215.
6	Ross, S. and Shortreed, I. M.	1990	JAPANESE FOREIGNER TALK: CONVERGENCE OR DIVERGENCE?	『Journal of Asian Pacific Communication』Vol.1, No. 1, 135-145
7	酒井峰男	1991	外国人場面における母語話者側のルール違反	名古屋大学日本語学科『日本語教育論集』第2号、57-69.
8	ロング, グニエル	1992	日本語によるコミュニケーション---日本語におけるフォリナー・トークを中心に---	『日本語学』12月号 明治書院、24-32.
9	横山杉子	1993	日本語における『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較---社会言語学レベルでのフォリナー・トーク---	『日本語教育』81号、141-151.
10	岡崎敏雄	1994	コミュニティにおける言語的共生化の一環としての日本語の国際化---日本人と外国人の日本語---	『日本語学』12月号 明治書院、60-73.
11	ロング, グニエル	1995	フォリナー・トークに対する意識	『日本語教育における社会言語学的基盤』文部省科学研究費総合(A)研究成果報告書 研究代表: 井上史雄、11-24.
12	J. V. Neustupny	1996	Japanese Discourse Studies: Native and Contact Situations 日本語の談話研究---内的場面と接触場面の場合---	『阪大日本語研究』8号、41-54.
13	備前 徹	1996	在日外国人と方言	『方言の現在』小林隆他編集、明治書院、342-369.
14	村上千かおり	1996	日本語における母語話者と非母語話者とのインターアクション ---外国人との接触経験とタスクとが母語話者側のインターアクションの仕方に与える影響---	『南山日本語教育』第3号 南山大学大学院、26-50.
15	永山友子	1997	日本語母語話者と日本語非母語話者の会話における日本語非母語話者へのフィードバック ---会話におけるrepairの相互作用をめぐって---	『筑波応用言語学研究』第4号、41-54.
16	町田延代	1997	電話における日本語のフォリナー・トーク・ディスコースの違い---日本語非母語話者の言語能力と交渉	『第二言語としての日本語の習得研究』第1号 第二言語習得研究会、83-99.

17	村上かおり	1997	日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響---母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて---	『世界の日本語教育』第7号、137-155.
18	和泉元千春	1998	日本語学習者の接触場面におけるコミュニケーションの破綻---使用語彙の簡略化の観点から---	『日本語・日本文化』第24号 大阪外国語大留学生日本語教育センター、19-35.
19	伊藤早苗	1998	初級日本語クラスにおけるティーチャートーク ---教師の質問はどのような学習者の発言を引き出しているか---	『北海道大学留学生センター紀要』第2号、103-115.
20	大平未央子	1998	日本語母語話者が非母語話者に対して行う「質問」の成功と不成功---インプットを理解可能にする調整とは---	第9回第二言語習得研究会(全国大会)口頭発表配布資料98.12.20
21	御館久里恵	1998	日本語母語話者の接触場面におけるフォリナー・トークの語相	『日本学報』17号 大阪大学文学部、111-121.
22	池田隆介	1998	日本語フォリナー・トークにおける語彙の修正に関する一考察	『比較社会文化研究』第4号 九州大学大学院比較社会文化研究科、31-38.
23	池田隆介	1999	理解可能な話し言葉としてのフォリナー・トーク	『日本語教育方法研究会誌』Vol.6 No.1、24-25.
24	大平未央子	1999	接触場面の質問-応答連鎖における日本語母語話者の「言い直し」	『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』第3号、67-85.
25	尾崎明人	1999	フォリナー・トークの功罪	『月刊言語』4月号 大修館書店、68-69.
26	オストハイダ, テーヤ	1999	対外国人行動と言語外的条件の相互関係	『日本学報』18号 大阪大学文学部、89-104.
27	加藤好崇	1999	問題解決行動としてのティーチャー・トーク ---心理言語学的観点からの分析---	『東海大学紀要』第19号 東海大学留学生教育センター、27-36.
28	西原鈴子	1999	日本語非母語話者とのコミュニケーション ---日本語教師の話はなぜ通じるか---	『日本語学』6月号 明治書院、62-69.
29	一二三朋子	1999	非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連 ---日本語ポランディア教師の場合---	『教育心理学研究』第47号、80-90
30	横須賀柳子	1999	授業場面における教師のスピーチ・スタイル	『ICU日本語教育センター紀要』第9号、61-76.
31	鄭恵允	1999	書きことばによる『接触場面』における母語話者側の言語的調整-『フォリナー・ライティング』の概念形成に向けて	『第4回社会言語科学会研究大会予稿集』
32	小林浩明	2000	日本語のフォリナー・トークにおける個人差	『日本語・日本文化』第26号 大阪外国語大留学生日本語教育センター、61-70.
33	大平未央子	2001	フォリナー・トーク研究の現状と展望	『言語文化研究』第27号 大阪大学言語文化部、335-354.
34	大平未央子	2002	日本語のフォリナー・ライティングにおける社会言語的調整~ネイティブ・ライティングとの比較および調整のメカニズム~	『言語文化研究』第28号 大阪大学言語文化部、211-228.
35	徳永あかね	2003	Foreigner Writingにおける語彙調整 ~日本人学生・留学生のメール交換より	『神田外語大学紀要』第15号 神田外語大学、233-247.

## Japanese foreigner talk research

— Where did it come from? What has it yet to accomplish? —

TOKUNAGA Akane

### Abstract

Although ‘foreigner talk’ was examined and classified by Ferguson in the late 1960’s, as one of the many registers used by a native speaker, its use and simplification has been gaining attention as an ‘optimal input’ for second language learners. The idea of ‘foreigner talk’ being an ‘optimal input’ for second language learners first appeared in the Interactionalist Learning Theories of the late 1970s and 1980s. Because of the influence of these theories and research, Japanese ‘foreigner talk’, which was first examined by Skoutarides in 1981, hasn’t been focused on as a register, but as a practical means of instruction for learners of Japanese.

In this article, I will review and use Ferguson’s early studies of register, as a starting point to re-examine Japanese ‘foreigner talk’ research. I’ll then review various ‘foreigner talk’ research which has come after Ferguson’s work. Finally, I will look at how Japanese ‘foreigner talk’ differs from the other registers used by native Japanese speakers.

【Keywords】 foreigner talk, Ferguson’s studies, register, Japanese native speakers

(Kanda University of International Studies)